

の目から」(高井貴一訳)、オードリィ・コバード、バーナード・クリック(編)『思い出のオーウェル』晶文社(1986)、p.290。

7. 同上、p.289。

8. 谷川俊太郎、徳永進『詩と死をむすぶもの』朝日新聞出版(2008)、p.21。

9. 「ヨハネの黙示録」共同訳聖書実行委員会(編)『聖書 新共同訳』Japan Bible Society(1987)、新約聖書；p.452。

#### 参考文献

川端康雄『ジョージ・オーウェル——「人間らしさ」への讃歌』岩波書店(2020)。

佐藤義夫「「喜びはかくばかり」——心の傷跡」和洋女子大学『英文学会誌』第48号(2014)。

## 人は人を撃てない ～オーウェル『カタロニア讃歌』の 一場面にみる～

西川 伸一

周知のとおり、17世紀イギリスの政治哲学者トマス・ホップズは「万人の万人に対する闘争」という有名な言葉を遺した。人間の本质について性悪説を主張したのである。「人間の生活は、孤独で、まずしく、陰悪で、残忍で、しかもみじかい」とホップズは書いた(204頁)。経済学は「ホモ・エコノミクス」(合理的経済人)を人間行動の前提としている。すなわち、人間は自分自身の効用極大化を利己的に目指して合理的に行動する存在だ、と経済学は仮定する。

性悪で利己的な人間たち——。だから極悪非道な犯罪はなくならないし、戦争も人類史の上で絶えたことはあるまい。気候危機を食い止めることも至難の業となっている。自分勝手ばかりがはびこり、人類の未来は暗いと悲観的に考えざるを得ない。

ところが、昨年(2021年)こうした人間観を真っ向から否定する書籍の翻訳が刊行された。ルトガー・ブレグマン(Rutger Bregman)というオランダ出身の歴史家・ジャーナリスト・ノンフィクション作家が書いた『希望の歴史 人類が善き未来をつくるための18章(上・下)』(文藝春秋)である。原著は2019年にオランダ語で出版され、翌年に英訳版が出されている。英訳版タイトルは*Human-kind: A Hopeful History*である。

同書は「トマス・ホップズの見解は、これ以上ないほどの外れだった」(上巻149頁)と断言する。そして、性善説的人間観が正しいことの証拠をこれでもかと読者に突きつけていく。

たとえば、戦場で兵士たちは互いに敵兵を殺すために撃ち合うことに、だれも疑問をさしはさまないだろう。しかし、第2次大戦に陸軍大佐として従軍した歴史家のサミュエル・マーシャルは、兵士へのグループ・インタビューを何度も行って奇妙なことを見出した。「戦場で銃を撃ったことのある兵士は全体の一五～二五パーセントしかいないことを知った」のである(上巻113頁)。

しかもこれは第2次大戦と米軍に限ったことではなかった。1860年代のフランス軍将校は、前線の兵士たちが両軍ともに敵兵の頭ではなくその上に照準を定めて撃ち続けたと証言した。あるいは「何でもいいから他の用事(略)を見つけて、銃を撃たない言い訳に」したという(上巻117頁)。

自分が撃たなければ殺されるという極限状態に至っても、人は人を容易には撃てないのだ。この「発見」を補強するために、ブレグマンは自らが「敬愛する作家」だというオーウェルの『カタロニア讃歌』の一文を引用している(上巻118頁)。念のため、イギリスで2021年に出された『希望の歴史』のペーパーバック版(Bloomsbury Publishing)に当たったところ、オーウェルの原文が正確に引用されていた(p.85)。ブレグマンが引用したのはIn this war～の一文だけである。だが、そ

